

# 感嘆文における sluicing について\*

佐藤元樹

## 1. はじめに

節省略の一種である sluicing は、(間接) 疑問縮約という和名が与えられているように、疑問文に限られた省略構文である。構文の定義上、sluicing は疑問文以外では認可されない省略現象ではあるが、wh 疑問文と形式的に類似した wh 感嘆文においても sluicing に似た省略現象が観察されている。本稿では、wh 感嘆文に見られる sluicing に類似した節省略現象を分析し、その構文的特徴を明らかにする。

## 2. Wh 節における節省略の諸特性

How や What ではじまる感嘆文は、一般的な英文法書で記述されているように、主語と述語が省かれることがある。そのような省略文は sluicing のようにも見えるが、間接感嘆文では節省略が容認されない傾向にある。

- (1) a. What a shot!  
b. It's amazing what a shot \*(she made). (Ginzburg 2012: 227)

感嘆文における節省略の可否は、補文またはその補文を選択する述語の意味特性にも左右される。次の例に示すように、感情的叙実述語 (be amazing/surprised) と叙実述語化した複合述語 (can't imagine/couldn't believe) では、節省略の容認度に差が見られる。

- (2) a. John saved a lot of money, and it's amazing how \*(he saved a lot of money).  
b. Sue bought that coat, and I'm surprised at why \*(she bought that coat). (柴原・松山 2001: 60)  
(3) a. He is writing (something), but you can't imagine {why / how} (he is writing). (柴原・松山 2001: 60)  
b. Someone brought a tarte tatin to the potluck, though I couldn't believe who. (Roberts 2019: 671)

(2)と(3)の対比は、一般的に、間接感嘆文と間接疑問文の違いに起因していると考えられている。紙幅の関係上、間接感嘆文と間接疑問文の違いについて立ち入った議論はできないが、Roberts (2019)はモダリティーと否定を伴った believe は疑問節を補文に選択すると主張している。そのような仮定のもとでは、(3)は何の変哲もない sluicing と分析されるが、(2)と比較するとわかるように、wh 節が疑問文的性質を帯びているほど、節省略が認められやすいことは注目すべきことである。本稿では、疑問文的性質をもつ wh 節ではなく、(1)や(2)のような wh 節における節省略に焦点を当て、その統語的要因や環境を分析する。

## 3. 間接感嘆文の節省略

ここまで、感嘆文では部分的に節省略が許されることを見てきた。間接感嘆文において、節省略が許されないことは、sluicing の認可条件を満たしていないことに起因していると分析することもできるが、主節感嘆文で節省略が許されることも同時に扱うためには、sluicing として分析するアプローチは有効ではない。本稿では、感嘆文の節省略が sluicing ではなく、繫辞文をもとにした fragment (answer)/stripping 型の省略構文であると提案する。

感嘆文の節省略が fragment/stripping であるとする、間接感嘆文で節省略が許されない特徴は、その省略構文特有の性質として説明される。近年、fragment/stripping 型の節省略が、埋め込み節においても適用できることが報告されているが、埋め込み節の fragment/stripping を許容する話者であっても、叙実述語の補文では節省略を許さないことが指摘されている。

- (4) Embedded Fragment (Weir 2022: 289)  
Who left early?  
a. I think John.  
b. ?? I found out John.  
c. \* I'm surprised John.
- (5) Embedded Stripping (Barbiers 2000: 15)  
John says that Pete will come and fix something,  
a. and I think/hope/think/belief the sink  
b. \* and I know/reveal/let on the sink

(4c)や(5b)のように、fragment/stripping が許されない文脈は、間接感嘆文にも当てはまる。なぜなら、間接感嘆文は、本来叙実的な節であるからである。したがって、叙実的な節の一種である間接感嘆文においても、(4c)や(5b)と同様に、節削除が許されないと考えられる。

#### 4. 主節感嘆文の節省略

本稿では、fragment/stripping を主節感嘆文における節省略にも仮定するが、その省略文は繫辞文を基底にしていると主張する。省略箇所が繫辞文であることは、以下に示す3つの特徴から証左が得られる。

第一に、省略された主節感嘆文には、繫辞文に相当する付加疑問文がつく。

- (6) a. What a mistake he made, \*wasn't it/<sup>OK</sup>didn't he?  
b. What a mistake, wasn't it/\*didn't he?

付加疑問文は、(6a)に示すように、先行文の主語と時制要素に対応する必要がある。付加疑問文の形成規則にしたがうと、(6b)の先行文には、he made ではなく、繫辞文である it was が存在していると考えられる。

第二に、省略された主節感嘆文では、形容詞が叙述用法となる。以下の例では、形容詞 heavy を取り上げる。

- (7) a. He is a heavy drinker. (#The drinker is heavy.)  
b. She married a heavy drinker. #How heavy!

形容詞 heavy は、限定用法と叙述用法で意味が異なることがある。形容詞 heavy が、heavy drinker のように限定用法で用いられた場合、(飲む酒の)量が多いことを表すが、叙述用法で用いられる場合は、体重超過であることを意味し、大酒飲みという解釈にはならない。そして、この形容詞を感嘆文で用いた(7b)では、heavy が体重超過の意味で解釈され、語用論的に不適格な文となる。(7b)に示すように、感嘆文で用いられている形容詞が叙述用法として機能しているということは、省略箇所が繫辞文であることを示唆している。

第三に、副詞句が wh 要素である感嘆文では、節省略が許されない。

- (8) a. How easily \*(she'd tricked him)!  
b.\*How easily (it was)!

副詞句を wh 句にもつ感嘆文は問題なく文法的であるが、副詞句を取り残した節省略は許されない。この理由は、副詞句が繫辞文の軸語 (pivot) として不適格であることと関連しているように思われる。当該の感嘆文が(8b)のような繫辞文であるとする、節省略の有無にかかわらず不適格となる。このように、省略文の残存要素に繫辞文の軸語と同様の範疇制限が課せられることから、省略文が繫辞文であることが裏付けられる。以上のように、感嘆文の節省略が許される統語的な文脈や分布は、sluicing よりも制限されており、本稿が提案する繫辞文をもとにした fragment/stripping によって捉えられる。

#### 5. おわりに

感嘆文では主節に限って sluicing に類似した節省略が許される。本稿では、感嘆文における節省略が sluicing ではなく、fragment/stripping であることを示し、省略が許されない統語的環境と省略文の統語的特徴を明らかにした。

#### 参考文献

Barbiers, Sjef (2000) "Intermediate landing sites," *Glott International* 4, 15–16.

Ginzburg, Jonathan (2012) *The interactive stance: Meaning for conversation*, Oxford University Press, Oxford.

栗原和生・松山哲也 (2001) 『補文構造』研究社。

Roberts, Tom (2019) "I can't believe it's not lexical: Deriving distributed veridicality," *SALT* 29, 665–685.

Weir, Andrew (2022) "Fragments and left-edge ellipsis: The division of labour between syntax, semantics, and prosody," *The Derivational Timing of Ellipsis*, ed. by Güliz Güneş and Anikó Lipták, 253–290, Oxford University Press, Oxford.

\*本研究は JSPS 科研費 18K12359 の助成を受けている。